



幕末から明治へ最後の藩主

7隻の艦船を持つ久留米藩

江戸時代の終焉とともに、久留米藩も幕末の動乱に巻き込まれていきます。10代藩主の有馬頼永が亡くなると、弟の頼成は18歳で久留米藩最後の藩主の座に就きました。藩の財政難を改めていた兄の遺志を継ぎながら、商工業を重視した新しい経済対策を進めます。久留米紉、菜種油、茶、こんにゃく芋などを「国産品」に定めて生産を奨励。藩の専売品として藩外に搬出する場合は、税をかけます。

藩の重臣・今井栄は、勝海舟と親しく、西洋の技術や兵制を導入して軍備を強化することを進めます。佐賀藩に招かれ、新式の大砲や蒸気船を造ることに成功した田中久重を呼び戻し、大砲や小銃などの兵器を製造。久留米藩は、7隻の洋式艦船を備え、江戸幕府、薩摩、長州、肥前に次ぐ海軍保有

藩になります。頼成は、鉄砲にも関心が高く、火縄銃を廃止し、西洋の銃器を輸入。「千歳流」という砲術流派をつくり、師範となつて藩士に練習させます。高良大社などに、自ら鉄砲で撃ち抜いた的を扁額として奉納しています。

藩の対立を抱え明治維新へ

嘉永6(1853)年、ペリーの黒船が来航してから、国内では攘夷論と開国論、佐幕派と勤王派の対立が激しくなります。久留米藩でも、政治の実権をめぐって、公武合体、開国を唱える佐幕派と尊王、攘夷を推し進める勤王派が激しく争いますが、佐幕派の力が強く、勤王派を抑え続けていました。藩を二分する対立のさ中、慶応3(1867)年の大政奉還により、260年あまり続いた江戸幕府は終わりを迎えます。

明治元(1868)年、藩政に

不満を持つ若い勤王派の武士たちは、藩の重臣で佐幕派の中心人物・不破美作を暗殺。この事件をきっかけに、藩の情勢は一変し、勤王派の水野正名が、政権を握ることになります。今井栄など10人の旧指導者たちは切腹となりました。

新政府への反発「藩難事件」

明治2(1869)年6月17日、版籍奉還で11代にわたり250年続いた久留米藩もこの日をもって終わりを告げます。藩主の頼成は、久留米藩知事に任命され、一地方の長官に。久留米城は、知政所になり、頼成は、高良山座主坊跡へと移り住みます。藩内には、明治政府に反発する者も多く、中央の政策に不満を持つ全国の有志と連携する動きが高まっています。

明治4(1871)年、長州藩から脱走した大楽源太郎と他3人の奇兵隊を久留米藩士・小河真文たちがかくまい、挙兵計画を企てます。この動きを察した政府は、軍隊を派遣し「久留米征伐」に動き出します。頼成への災いと計画

の発覚を恐れた小河たちは、大楽たちを殺害。局面の打開を図りましたが、明治政府は、藩責任者の水野や首謀者の小河ら57人の関係者を処罰します。頼成は、30日の謹慎ののち、藩知事の職を失い、東京に移り住みます。藩に仕えていた武士たちも職を失い、困窮する日々。頼成は、旧藩士を救済するため、毎年金5千円(現在で約2千万円)の資金援助を続けます。藩士たちは、政府からの資金援助と合わせ、授産会社「赤松社」を創業。社員となつて久留米紉や和傘などの製造販売を開始し、生計を立てていきます。幕末の動乱に翻弄された久留米藩最後の藩主・有馬頼成は、明治14(1881)年54歳で亡くなりました。

◆ ◆ ◆
昨年10月からスタートしたシリーズは今号で最終回です。250年続いた藩の歴史を身近に感じていただけたのではないだろうか。
①文化財保護課 ☎0942・30・979225、FAX0942・30・9714

久留米歴代藩主

- 初代 豊氏
- 二代 忠頼
- 三代 頼利
- 四代 頼元
- 五代 頼旨
- 六代 則維
- 七代 頼僮
- 八代 頼貴
- 九代 頼徳
- 十代 頼永
- 十一代 頼成

は今回のモノ語り
と関わる藩主

HP ならではの
秘話も連載中!



▲藩難事件で明治政府から処分された藩士を祭る慰霊碑(寺町遍照院)

◀11代藩主・有馬頼成の肖像(有馬家所蔵)。安政6(1859)年には、不破美作を明善堂(現在の明善高校)の総監に任命します。武道稽古場を造るなど建物の改築に着手し、文武両修の学校へ。学制改革にも着手します

▼田中久重の鑄砲所跡。高牟礼市民センター東側に建立されています。元治元(1864)年、久留米藩に戻った久重は、この地でアームストロング砲を鑄造。裏山から約3,000m先の飛岳に向けて試射しました



▲久留米藩最大の軍艦「千歳丸(せんざい丸)」。慶応3(1867)年、イギリスから購入。その額は、8万5,000ドルでした。当時の米の価格で換算すると、現在の8億5,000万円に相当します。